

2023年4月30日（日）／説教者：國分美生

説教：「弱くなった神」

聖書：マルコによる福音書14：66～72

広島に原爆が落とされた理由は、いくつかの条件が重なったためであると考えられています。その理由の一つが、軍隊・軍事施設・軍需工場などが集中していた町であったこと…三日後に原爆が落とされた長崎も造船所や兵器製造工場などが集まる日本軍の重要都市でした。アメリカは日本の武力・暴力をさらに強い効果ある暴力によって押さえつけようとしてしました。広島に落とされた核爆弾は「リトル・ボーイ」、長崎に落とされたのは「ファットマン」。ボーイ、マン、どちらも「男」です。威力があって相手を打ちのめすことが出来る存在を男性的存在と捉えています。力が強い=優れている、強くあってこそ男、そういう概念と共に世界の歴史は刻まれてきました。それは何千年もの昔から今に至るまで、あまり変わりありません。

ローマ帝国には「男が完成形で、それ以外は劣ったもの」（「人間は二種類に分けられる、男かそれ以外か」という概念がありました。男と言ってもマッチョで非の打ち所のない者だけで、病気、障害、高齢者、子どもは「それ以外に」に分類されます。その「男」のイメージの最高峰がローマ皇帝でした。何者からも貫かれることの決してない征服者がローマ皇帝であり、また同時にローマの掲げた「神」のイメージでした。当然ユダヤの人々の中にもその神のイメージは浸透していたでしょうし、またイスラエルの神は「万軍の主」としてイメージされてもきました。イエスをメシアと信じる弟子たちも、そのような力強い神を念頭に置きながら付き従っていったのでしょう。群衆に捕えられ、暴力を受けているイエスをペトロも見た時、「あなたもイエスの仲間だ」と言われて「知らない、関係ない」と必死で否定したのは、自分の身に危険が及ぶという心配からだけではなかったはずです。ボロボロになり十字架に刺し貫かれようとしているイエスを見て、あれは、自分の期待していた救い主ではない、と思ったのではないのでしょうか。それがペトロの躓きでした。

抵抗もせず、十字架にかかり死んでいった神は、弱い神のように見えます。しかしその「弱い」という表現もまた、力を優れたものと誇る人間から見た一方的な表現でしかありません。武力を誇りとし、力を神とすることがどれほど愚かなことであるかをわたしたちは噛み締めます。そして聖書から訴えてくるキリストの姿から、それはやはり真であると思ひ知らされます。（國分美生）